

九州帝國大學醫學部で學んだ留學生： 民国・満洲 国・台湾からの留學生を中心に

金, 珽実
九州大学留学生センター：講師

<https://doi.org/10.15017/4782109>

出版情報：九州大学留学生センター紀要. 26, pp.43-60, 2018-03. 九州大学留学生センター
バージョン：
権利関係：

九州帝國大學醫學部で學んだ留學生

— 民国・満洲国・台湾からの留學生を中心に —

Studying medicine at the Kyushu Imperial University

— focusing on China・Manchukuo・Taiwan International Students —

金 斑 実*

1. はじめに

九州帝国大学は1903年4月に設置された京都帝国大学福岡医科大学を前身としている。1886年に帝国大学令が公布されると九州に帝国大学を設置する機運が高まり、1900年1月29日の第14帝国議会において「九州東北帝国大学設置建議案」が可決された。長崎県や熊本県との間で誘致の綱引きが行われたが、結局は賛生館の流れを汲む福岡県立福岡病院を母体に1903年京都帝国大学の分科大学として福岡医科大学が設置され、福岡県技師から転じた大森治豊が学長兼附属医院長に任じた。また、日露戦争後の産業の発展により、工業の発達が要望され、それを担う高等教育機関拡充の要望が高まったところ、福岡にも工科大学設置の聲が高くなった。文部省は時の文部次官真野文二を創立準備委員長に命じ、東大の新進学徒の中から選んで教授候補として欧米に留学させる一方、建築工事が1910年6月より工を起こして創立の業着々と進捗し、かくて同年12月勅令第四百四十八号をもって九州帝国大学の設置が公布された。それ

と同時に勅令第四百四十九号をもって九州帝国大学工科大学官制が公布され、翌1911年1月から施行された。初代学長は文部省専門学務局長福原鐐二郎であったが、同年4月1日理学博士山川健次郎が九州帝国大学総長に任ぜられた。九州帝国大学は、東京、京都、東北に次ぐ日本の四番目の帝国大学として発足したのである¹。

九州帝国大学留学生に関する研究としては、主に、①研究代表者折田悦郎「九州帝国大学における留学生に関する基礎的研究」平成14・15年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書2004.3 ②武継平『異文化のなかの郭沫若—日本留学の時代』九州大学出版社2002.12 ③岩佐昌暉「福岡滞在期の郭沫若文学の背景その他」『言語文化論究』九州大学大学院言語文化研究院17、2003.3がある。本研究は、先述の先行研究を踏まえて植民地時代に日本への留学の道を選んだ医学者の足跡、殊に九州帝国大学の留学生に焦点を当てて帝国大学初期からの留学生像を明らかにすることを目的としている。詳細は、大学資料、新聞記事、同窓会資料などを使い、九州帝国大学への留学のキッカ

*九州大学留学生センター講師

1 金斑実「九州帝國大學に學んだ留學生—醫學部朝鮮人留學生を中心に—」『九州大学留学生センター紀要』第25号2017.3 pp.52-53

ケ、何を学び、どこでどのように活躍したか、
帝国時代の知識人がどのような世界認識で将来

を描き出し、戦後の彼等の人生の中でどのよう
に影響していたかも探っていききたい。

2. 民国からの留学生

1) 学生名簿における留学生データ

入学年	学生等	学科	氏名	出身地	卒業年	出身校	備考
1913	学生	医学科	呉萃蘭	浙江省	1917		
1913	学生	医学科	戎肇敏	浙江省	1917	一高	
1914	学生	医学科	劉先登	湖北省	1918		小野寺内科副手（文化事業部特選給費生）
1914	学生	医学科	徐誦明	浙江省	1918	六高	民衛生出版社社長・中華医学雑誌編集
1915	学生	医学科	崔元愷	広東省	1919	三高	開業
1915	学生	医学科	柳南柱	広東省	1919		
1915	学生	医学科	蘇炳麟	広東省	1919		
1915	学生	医学科	顧祖漢	江蘇省	1919	八高	
1916	学生	医学科	柳汝昭	広東省	1920		
1916	学生	医学科	胡鯤	浙江省	1920	八高	清華大学医院
1917	学生	医学科	陳中	浙江省	1922	六高	
1917	学生	医学科	鄭民沢	三江省	1921	三高	
1918	学生	医学科	夏禹鼎	浙江省	1922	三高	浙江中医院
1918	学生	医学科	郭開貞	四川省	1923	六高	中国科学院長、郭沫若
1918	学生	医学科	錢潮	浙江省	1922	八高	上海医学院内科教授
1918	学生	医学科	楊子驤	広東省	1923		
1918	学生	医学科	余霖	浙江省	1922	一高	大学院進学
1919	学生	医学科	陶熾	江蘇省	1923		
1919	学生	医学科	何愼	広東省	1923		
1919	学生	医学科	周文達	浙江省	1923		
1919	学生	医学科	揚子韜	広東省	1923	六高	開業
1919	学生	医学科	龔寶鍵	浙江省	1923	七高	大学院進学
1920	学生	医学科	彭澤中	湖南省	1923		
1920	学生	医学科	祝振綱	江蘇省	1924	四高	公費
1921	学生	医学科	夏禹銘	浙江省	1925	三高	公費、浙江医院
1921	学生	医学科	譚大同	広東省	1925	三高	公費、開業
1921	学生	医学科	董道蘊	浙江省	1925	三高	公費
1921	学生	医学科	王大徳	四川省	1926	六高	公費
1922	学生	医学科	戴夏民	浙江省	1926	八高	公費
1923	学生	医学科	彭玉書	広東省	1927	一高	公費
1923	学生	医学科	王延綱	奉天省	1927		文化事業部支給

1923	学生	医学科	戈紹龍	江蘇省	1927	二高	公費、耳鼻咽喉科副手（文化事業部特選給費生）、南通医学院副院長
1924	大学院		余霖	浙江省	1927	一高	
1924	学生	医学科	劉祖霞	江西省	1928	七高	公費、元研究生（文化事業部特選給費生）、開業
1924	学生	医学科	蘇記之	江蘇省	1928	水戸	文化事業部支給、産婦人科副手、開業
1925	大学院		龔寶鍵	浙江省	1940	七高	
1925	学生	医学科	孟憲蓋	山東省	1929	六高	元研究生、整形外科副手（文化事業部特選給費生）、江西医学院院長
1926	学生	医学科	莊兆祥	広東省	1930	二高	省費、元研究生、開業
1934	専攻生		郭維新	陝西省	1937		研究補助員
1934	専攻生		員符謙	陝西省	1937		研究補助員
1934	専攻生		嚴可寬	江蘇省	1935		
1934	専攻生		袁寶慈	河北省	1936		
1934	専攻生		唐耀陸	安徽省	1936		
1934	専攻生		趙恩沛	河北省	1936		
1934	専攻生		沈健安	浙江省	1934		
1934	専攻生		陳其軒	福建省	1935		
1934	専攻生		廖垂平	広東省	1936		
1934	専攻生		牛明辰	江南省	1936		
1934	専攻生		呂文若	江蘇省	1935		
1934	専攻生 (研究・実習者)	医学科	陳閩明	河南省		北京大学 医学院本科	
1934	専攻生		劉天嘯 (女)	広東省	1936		
1934	専攻生 (研究・実習者)	医学科	隋仁増	山東省		北京大学 医学院本科	
1934	専攻生		劉兆楨	浙江省	1937		
1934	専攻生		路忠平	江蘇省	1936		
1934	専攻生		劉士琇	安徽省	1936	八高	文化事業部補給
1935	大学院	医学科	林登發	福建省	1938	長崎医大	私費
1935	学生	医学科	金志莊	浙江省		七高	
1935	学生	医学科	李忠祺	河北省	1939	一高	九大医学部副手（外科学第二教室勤務）、新華医院外科
1935	専攻生		潘士華	広東省	1937		
1935	専攻生		王世榮	河北省	1936		
1935	専攻生		程崇圯	江西省	1936		
1935	専攻生		厲喬華 (女)	浙江省	1936		

1935	専攻生 (研究・実習者)	医学科	高葆謙	河南省		河南大学 医学部	
1935	専攻生		王濟華 (女)	浙江省	1937		
1935	専攻生		秦晚香 (女)	山東省	1936		
1935	専攻生		徐幼慧 (女)	浙江省	1936		
1935	専攻生		呉振家		1936		
1935	専攻生 (研究・実習者)	医学科	王伯駿	河南省		河南大学 医学部	
1935	専攻生		周昱	浙江省	1936		
1935	専攻生		徐佐周	山東省	1937		
1935	専攻生		田怡仙 (女)	河北省	1936		
1936	学生	医学科	楊子莊	広東省	1940	一高特設 高等科	卒業後医学部にて研究、楊子莊診療所
1936	専攻生 (研究・実習者)	医学科	劉典文	河北省		奉天医科 専門学校	
1936	専攻生		何君平	広東省	1936		
1936	専攻生		陳其軒	福建省	1936		
1936	専攻生 (研究・実習者)	医学科	陳竹泉	河北省		北京大学 医学院本科	
1936	専攻生	医学科	冉榮封	四川省	1936		
1936	専攻生 (研究・実習者)	医学科	沈瑞銀	江蘇省		満洲医科 大学専門部	
1936	専攻生	医学科	林伯輝	福建省	1938	南満医学堂 本科	退学後研究生として在学、特選、九大 医学部附属医院医員
1936	専攻生	医学科	劉永鈞	福建省	1937	上海東南 医学院	
1936	専攻生	医学科	張局難	福建省	1937	南通医院 医科	
1936	専攻生 (研究・実習者)	医学科	趙綬新	浙江省		浙江省立医 薬専門学校 医科	
1937	専攻生 (研究・実習者)	医学科	沈汝梅	浙江省		浙江省立医 薬専門学校 医科	
1937	専攻生	医学科	王壽松	江西省		江西省立医 学専門学校	

1937	専攻生	医学科	楊承恩	河北省		北京大学 医学院本科	
1937	専攻生 (研究・ 実習者)	医学科	葉樹棠	浙江省		南通学院 医科	
1938	学生	医学科	陳兆桂	広西省	1941	一高特設 高等科	卒業後医学部にて研究、公安医院長
1940	学生	医学科	鮑耀東	広東省	1943	一高	
1940	専攻生		于水竹	山東省	1943	北平大学 医学院本科	華北省費
1941	専攻生		陳英敏	福建省	1942	陸軍国医学 校甲種士官 学生卒業	1944年再入学
1941	専攻生		劉怡漢	山西省	1942	北京大学 医学院	
1941	専攻生		胡進思	河北省	1943		
1943	専攻生		趙常琚	山東省	1944		
1944	専攻生		陳英敏	福建省			

2) 人物像

① 吳萃蘭

「日本は明治維新後、国運隆昌科学急進、就中医学は其の最たる者とか、蓋し欧米先進国の医学の精華を採り、衷心研究、遂に今日の大成をもたらしたのであらう。我が九州帝大に於ても之を裏書するが如く、医学部の歴史最も古く万般の設備も理相に近く、其の内容も充実し、遂に大正二年当時中国医学尚ほ萌芽時代にあり、瞠若漠然として人後に落ちるを潔しとせず敢然「失之東隅収之桑榆」の境地に入りこの福博の天地に第一歩を印したのは吳萃蘭及び戎肇敏の両氏にして、実は九大に於ける留学生の先達である。…」²と吳萃蘭と次に取り上げる戎肇敏の二人が民国からの医学部留学生の第一号であることが確認できた。

② 戎肇敏

1887年生まれ、日本の有名な文学者芥川龍之

介と同時期に第一高等学校を卒業して九州帝国大学に入学し、医学（外科）を勉強する。大学を卒業して1919年5月に北京にある国立北平専門学校の外科教師となる。後輩である徐誦明も同年病理学の教師となった。1922年4月に北京協和病院に移し、その後震旦医院の院長を務める。1937年日中戦争により、一家共に北京から南の方に移し、最終的には上海に定着した。また「戎肇敏医廬」を設立し、郭沫若の紹介で周恩来総理、映画俳優白楊など多くの著名人の診察を行なったとされている。中華人民共和国成立後、上海ボイラー工場で医者として活躍した。北京時代に韓国の有名な書芸家姜昌元と共に歯科病院を開き、北京に住んでいる中・韓・日の上流社会の多数が患者として訪れた。その中には、軍閥の吳佩孚北京大学教授の彭漢懷、啓蒙思想家梁啓超、図画師齊白石などがいたと言う。



③劉先登

(1888-1947)、湖北宜昌県人で、1905年に「宜昌学社」の推薦で、公費で日本に留学して弘文書院、東京普通中学、東京一高で学習し、1914年に九州帝国大学に入学した。1918年に卒業して帰国し、1920年に蒙古庫倫医院院長、南京鼓楼医院医者、国民革命軍（賀龍部）軍医を務めたが、1928年に再度九州帝国大学に戻り、1931年に博士学位を取得した。指導教官である小野寺教授より博士記念章一枚が贈られた。帰国後北京大学医学部内科教授、北京大学医学院内科教授を歴任した。郭沫若に『蒙古受難』を執筆するよう勧められたが断ったという。彼は1928年に九州帝国大学で勉強している際に、新聞でイギリス商人が中国のピータンにはバイ菌が生じ、食用できないと発表し、それによってイギリス税関はピータンの輸入を禁止したと記事を読んだ。それを目の当たりにし、彼は手元の研究を止め、ピータンの研究に取り組み、繰り返

し様々な角度から進め、最終的に『ピータンの研究』を書き上げ、博士学位を申請し、学位を取得した。またイギリス側も実験を行い、劉の論文に間違いがないと判断し、税関も禁止令を撤回したという。また、劉先登は小野寺 直助と共著で「臍形と左利」『Ethnology (Japanese)』1930.12を出版した。以下は35年に民国政府から与えられた医師免許書である。



④徐誦明

(1890年10月20日 -1991年 8月26日)、中国病理学の創立者の一人で、浙江新昌人、1908年両親を内緒に日本に留学したが、経費問題で一旦帰国した。1908年に改めて東京第一高等学校の予科に入学して1910年に岡山第六高等学校に入学し、1914年には九州帝国大学医学部に入学し、1918年に卒業後続けて病理学を研究していた。この時、徐誦明は郭沫若、夏禹鼎、銭潮、陳君哲、劉先登など同志を『夏社』という組織を設立し、日本の新聞雑誌に掲載されている中国に対する言論などを翻訳して印刷し、中国の大学及び新聞社などに送って、国内革命活動を助けた。この活動を中国旅順に設置されたスパイ機関に見つかり、外務省に報告したため、徐

誦明、郭沫若、夏禹鼎など留學生の排日活動が禁止され、帰国を勧められた。よって、1919年に帰国し、国立北京医学専門学校病理学教授を務め、中国で初めて病理研究室を創設し、中国語で病理学を講義した。1926年に北閩戦争時、国立第二中山大学医科教授、1927年に国民革命軍司令部軍医処衛生課長、その後北京に戻り、国立北平大学医学院院長、1932年より北平大学代理校長、1943年中華医学会理事、1944年国立同済大学校長兼医学院院長、1946年国立瀋陽医学院院長兼病理学教授、中華人民共和国設立後は衛生部教育処長、北京医学院病理学教授、中華藥典編纂委員、衛生教材編審委員会常務委員、中華医学雑誌総編集、1958年文化大革命時に右派になり、1978年に名誉を恢復し、九三学社中央委員会顧問、中央參議委員会委員、全国政協委員を務め、101歳の高齢で逝去された。



1918年、郭沫若（前中）与日本留学同学夏禹鼎（右一）、徐誦明（左一）等記念写真。

⑤夏禹鼎

1889年2月1日に浙江奉化生まれ、1914年に郭沫若、郁達夫、钱潮、范寿康、余霖、成仿吾と共に日本へ留学した。1919年5月4日学生運動が起きた影響で、先述のように、郭沫若、钱潮、陈君哲、徐誦明、刘先登などと共に、福岡で夏社を創立し、愛国運動を行なった。1923年に小児科と内科の医学博士号を取得し、日本人女性の与吉野三少と結婚して1924年に帰国する。1928年にドイツに留学し、ベルリン大学の博士号を取得して1931年に帰国し、南京鼓楼医院を創設する。その後南京病院の院長を務め、1951年には杭州省立医院内科主任、1960年には浙江医院内科主任を務め、1972年1月21日逝去された。彼は、医学者であると共に、文人でもあり、書画収集家でもある。

⑥郭開貞（郭沫若）

（1892.11.16-1978.06.12）郭沫若は中華民国・中華人民共和国の政治家・文学者、詩人、歴史家である。原名は郭開貞で、開貞は諱、沫若は号にあたる。中国の近代文学・歴史学の先駆者である。四川省嘉定府樂山県生まれで、1914年に日本へ留学し、第一高等学校予科で日本語を学んだ後、岡山の第六高等学校を経て、九州帝国大学医学部を卒業した。在学時から文学活動に励み、1921年に文学団体「創造社」の設立に参加するが、この設立の仲間に、郁達夫などがある。この間に処女詩集『女神』を発表する。その後国民党に参加するも、1927年蒋介石と対立後に南昌蜂起に参加し、直後に中国共産党に加入し、「請看今日之蒋介石」（今日の蒋介石を見よ）を書いたことで、蒋介石に追われ、1928年2月日本へ亡命した。千葉県市川市に居を構え、中国史の研究に没頭する。1937年に日本人の妻を残し帰国して国民政府に参加し、1942年に重慶で戯曲『屈原』を発表して大きな反響

を呼ぶ。戦後、中華人民共和国に参画して政務院副総理、中国科学院院長に、1950年全国文学芸術連合会主席、1954年には全人代常務副委員長に就いた。1955年は訪日科学代表団の団長として18年ぶりに訪日する。1958年共産党に入党し、1963年中日友好協会名誉会長になる。文革中は自己批判（1966年4月）を行なったが、迫害は免れなかった。1971年に科学院院長、全国人民代表大会常任委員会副委員長を務めたが、1978年北京で病没してしまう。

1955年に「殺人的」な日程で代表団の日本滞在はわずか二十五日間であったが、東京を皮切りに、千葉、市川、名古屋、京都、大阪、岡山、広島、福岡、下関、八幡、別府などを訪問し、精力的に各界の人々と接触し、学術・文化交流を行った。その際に九大訪問を実現し、1955年12月17日に講演を行った。①博多は両国交流の拠点 ②医学の中から人民愛を学ぶ ③建設に日本の進歩的要素を吸収の内容になるが、詳細を見てみよう。

私は大正七年福岡に来て、九州帝国大学医学部に入ることを決めた。何故私が東大や京大などを選ばずに九州大学を選んだか、そのわけをお話する。なぜなら私は福岡が好きだったからです。私は若い時から、歴史の教科書で博多湾を知っていました。ずっと以前お国の奈良平安時代、多くの留学生が中国に派遣されて来ました。それが出帆した港は、歴史の教科書によると、博多からであった。だから博多は以前から中日文化、経済交流の重要な地点であった。現在名高い博多織は教科書によると、日本の弥左衛門という人が広東などで学び、その技術を日本に持って来たので、今日でも、博多織は有名である。私は、さきほど菊池教授と話したが兪良輔が博多に版木を

持って来たが博多版木も今はないとの話である。このように博多は非常に早くから中日交流に深い関係があった。そのために私はこの福岡を選び、九州大学医学部を選んだのです。私は福岡に来て、帝大に入ってから諸先生、特に小野寺先生には非常に親切にしてくださいまして、私の選択が間違っていたと思った。私はこの九大で、五年以上学生々活を送りました。私はここにおられる諸先生に白状しますが、学生として、同窓生として、真面目な学生ではなかった。福岡の大自然は、美しい。毎日目にしている博多湾はなんと美しいでしょう。いと違って、以前の千代の松原は美しい所でした。このように私は、毎日美しい大自然と接触し、諸先生から親切にされてあまり勉強しなかった。私は医学の勉強を怠ったばかりではなく、別の道を歩んだのです。…このように、われわれのなすべき事は沢山あり、働き手の幹部と科学的知識が必要である。目下中国では大量の働き手工作幹部の養成を計画している。私たちは全世界の各国人民から進歩的なものを学びとりたい。全中国人民は新しい基礎のうえに立って中日の文化交流を一そう発展させたいと心から願っている。こゝにいる同窓諸先生はいささか憤慨に感じられていると思う。それは兄弟のような中日の国交が回復していないことである。しかしこの状態でも両国の学術その他の交流を押し進め発展させようだろう。例えば暇があったら先生方はどんどん中国を訪問して、建設的批判をあおぎたい。短期間（一〜三ヶ月）の講義も可能であろう。このような方法は大歓迎する。お国の政府も、これにそんな妨害を加えないでしょう。それ

に学術面の研究資料成果の交換もたやすくできるだろう。両国が代表を送って翻訳についてもお互いに推進できよう。こうした仕事は国家の現況でも可能であろう。留学生、学者、記者の相互交換派遣は目下困難であり、一日も早く中日の国交回復を待っている。語りたいことは千言万語ありながら、時間の制限が残念です。機会があれば、中国を是非訪ねてください。喜んで教を乞う。若い同窓に希望するのは、立派な師の指導のもと、専門の勉強の他に祖国・真理・平和・人民を愛する人に成長する勉強もして欲しい。若い皆さんが中日国交回復に力をつくされることを希望する。最後に皆さんの絶えざる進歩と発展をお祈りしたい³。



医学部実験室にて



卒業写真（郭沫若と同級生、前2列目左から2番目の座っているのが郭沫若）



郭沫若先生顕彰碑 in 九州大学病院キャンパス

⑦ 銭潮

（1896年11月20日 -1994年1月18日）浙江杭州生まれ、小児専門家、寄生虫病理学専門家である。1913年に浙江医学専門学校に入学し、同年日本へ留学、1914年から1918年まで東京の予科と九州帝国大学で医学を勉強し、1922年に同病院で研修し、1924年に杭州に戻り、臨床、共学、研究を行なった。1930年に「肥大吸虫症が宿主の身体に対する影響」の論文を書き上げ、1937年に『肥大吸虫症に関する研究』で九州帝国大学の医学博士号を取得した。1958年に住血吸虫病の予防治療活動を行い、1959年に上海中心病院で院長兼小児科主任を務めた。当時上海では中毒型細菌性赤痢が流行し、アトロピン療法で気管支痙攣の合併症を治療した。1977年に中国微細循環障害とヒヨス類似薬研究学会長を務め、同年、祝寿河・楊国棟と共に主編で『微細循環障害とヒヨス類似薬』を出版した。



3 『九州大学新聞』（1955年12月25日）

⑧楊子驥

広東国立中山大学医科の教授で、附属第二病院の医務も総担当した。「日本医界に対する民国医界の希望」『同仁』第3巻第11号 1929年11月号27-28 を発表し、また孫文の秘書である胡漢民の治療にも携わった。

⑨陶晶孫

(1897-1952、留学期間：1923-1928) 中国の作家と医学者で、名は熾、晶孫は字であり、本名陶熾である。江蘇省無錫県出身で、1906年に家族とともに来日し、九州帝国大学、東北帝国大学医学部・理学部などに学ぶ。九州帝大在学中創造社同人となり、処女作『木犀（もくせい）』を日本語で郭沫若らとの同人誌『グリーン』に発表し、1922年中国語に直して『創造』季刊に転載した。多才で音楽的才能にも富み、東北帝大ではオーケストラを組織した。1929年帰国し、郁達夫から『大衆文芸』を受け継ぎ、その編集にあたるかたわら、人形劇をはじめとする演劇に関心を寄せ、上海芸術劇社に加入して活躍した。1931年上海自然科学研究所に入り、社会衛生学を研究。その後一時台湾に住んだが、1950年（昭和25）日本に亡命し、東京大学講師などを務めた。著書としては小説集『音楽会小曲』（1927）、没後に刊行された『日本への遺書』（日本語）などがある。



⑩周文達

(1892-1958) 1911年に九州大学帝国大学で医学を学び、卒業後大学に留まり内科を二年間研究し、11年間の留学生活を経て1922年に帰国した。上海に戻って開業し、大夏・南洋・東南など医学院で教授を担当し、1927年から南京国民政府内政部衛生司第三科科长、1938年から浙江任英士大学、省立医薬専科学学校教授などを担当、1945年秋に内科専門家で医政管理の経験から臨海で病院の設立活動を主催し、台州の専門家の支持の下で、台州公立病院を設け、院長兼内科医師、主任を担当した。その後、全国で第二例、浙江省で第一例のレプトスピラ症の診断を行った。医務主任、副院長、浙江省政協委員など歴任したが、1957年文化大革命により批判され、1958年7月に「事実を述べる」際に、雷に打たれ、逝去された。彼は日本語・ドイツ語・英語に熟達し、晩年にはロシア語も自学し、中国で最初の薬物辞書『中華薬典』（民国版）を編纂し、『内科神経系疾病』を翻訳出版した。また麗水病院で「レントゲン装置」と言われるほど50年代同病院の医療技術の発展に多大な貢献を行なった。

⑪戴夏民

戴笠の従兄弟で、九州大学で医学を勉強し、帰国して南京鼓楼医院の主任医師を担当し、後に、軍統局四一医院の少将院長になる。1952年に有罪判決を受けたが、1957年に釈放され、1973年に病死される。中国の優秀なドラマ『暗算』の中の人物としても出ている。

⑫戈紹龍

(1889-1973) 江蘇台東人で医学博士、医学家で、広西省立医学院の創立メンバー（最初の校長）である。1915年江西医学専科学学校を卒業して、1927年に九州帝国大学医学部を卒業する。1930年に医学博士号を取得し、北平大学医学院

耳鼻咽喉科教授兼主任、河北医学院教授、院長を歴任した。1933年に広西省衛生委員会医院、1934年に広西省立医学院教授、院長兼耳鼻咽喉科主任、11月21日に広西省立医学院院長、1935年に広西省立医学院附属医院院長、広西省政府衛生委員会医院を兼任した。一生イワン・パブロフ学説を研究し、『大脳半球の働きについての講義』『ソ連心理科学三十年』を翻訳し、『高級神経活動論文集』を著した。中国で最初にロシアの生理学者イワン・パブロフ学説を国に紹介した学者である。また、戈紹龍編『イワン・パブロフ百年誕生記念』時代出版社 1949、戈紹龍編『實用ロシア語文法』中華書局 1952もある。



⑬劉祖霞

江西省西部上栗県出身、1920年に日本第一高等学校予科に入学し、1933年に九州帝国大学で医学博士号を取得、清華大学校医、北平大学講師、中山大学教授兼医学院院長、戦闘中に英領北ボルネオで医師を務め、後に香港に移住し、1984年にオーストラリアに移住した。現代詩『椰風集』なども発表した。劉祖霞『肺炎』商務印書館 1934を著作した。

⑭孟憲蓋

九州大学歯学部と江西医学院口腔医学系との部局間交流協定は1987年11月11日に締結された。江西医学院の第5代院長の孟憲蓋先生は九州大学医学部の卒業であり、九州大学医学部と

の関係が深く、当歯学部との交流のきっかけは、医学部間の交流から派生したものである。実質的な交流は1988年から始まり、その後毎年、本学部から2名程度の教授等の派遣を行い、江西医学院からは本学部の国際交流基金により若手研究者を招聘している。さらに、江西医学院側からは例年の如く、副院長（副学長）や教授、助教授クラスによる九州大学訪問が行われている。従って、本学部が交流関係を有するアジアの4大学の中でも、江西医学院は最も熱心で、交流も深い関係が続いている協定校である。

⑮郭維新

詳細は不明であるが、「前連合部より発生した喉頭ポリープ症例」『耳鼻臨床』50 1934を著した。

⑯潘士華

(1904-1990) 広東宝安人で1927年に中山大学医学院を卒業して1935年から1937年まで九州大学に留学して医学博士号を取得し、日本人の嫁をもらったが、日中戦争が起き、帰国した。その後、中山大学医学院で副教授、教授、解剖研究所主任になった。1942年に桂林等で病院を開業し、1946年以降広西省立医学院の教授、1951年以降は広西省医学院副教授兼解剖学教育研究組織の主任を担当した。彼は人体解剖学精通し、博士論文『十月胎児大脳皮層細胞構築の分野』は脳細胞形態学に新しく貢献した。彼は教育研究に対する姿勢が厳しく、標本を収集したり、模型を自作して設備を整えたり、教材を編纂するなどして教育環境を改善した。『人体解剖学講義』『組織学及び発生学講義』『神経解剖学講義』と実習指導教材などを自ら編纂した。しかし、文化大革命により、教育と研究活動は一切停止され、学内で連れまわされたりして精神的身体的に被害を受けた。それにも関わらず



楽観的な態度でその後の研究教育活動に臨み、多くの若い研究者を世に送り出した。その後、中国解剖学会理事及び広西解剖学会副理事長、名誉理事長、第三回全国人民代表大会自治区第二回人大代表、自治区第三回政協委員、第四回特別要請委員、第五回委員などを歴任した。

⑰程崇圯

1943年3月10日に江西医学院（現在は南昌大学）内科に教授程崇圯が入った。その後、1959.7-1966江西医学院副院長、1971.12-1973.3江西医学院革委会副主任、1973.3-1979.6江西医科大学革委会副主任、1979.6-1983.8江西医学院副院長を歴任した。程崇圯「急性血吸虫病的诊断与治疗」『江西医药』、程崇圯等「中医治疗高血压的初步临床观察」『江西医』1959年第10期（江西医药杂志编辑部出版、江西省医学会）を著した。

⑱厲喬華

（1912-2002）女性、浙江杭州人で1934年に北平大学医学院を卒業し、同学院で小児科の助教になった。同年九州大学に留学し、小児科の勉強し、日中戦争により帰国し母校で引き続き教鞭を取り、その後西安臨時大学医学院の創設に関わった。浙江省児童保健院院長、浙江大学教授、児童科学院生指導教員、小児科専門である。また全国人民大会代表、浙江省赤十字会長なども歴任した。夫・陳礼節も京都大学医学部卒業後、同大学内科副手、博士学位を取得し、日中戦争後西北連大医学院内科学教授及び、診療所の内科主任なども担当した。また政協浙江省委員会副主席、浙江民進創始者で主要リーダーの一人である。

⑲徐幼慧

1935年に九大に留学しているが、彼女の父親

は1918年に九大を卒業した徐誦明で、父女とも九大で勉強した珍しいケースである。「医学博士、医学士達の其の後の発展家、活動家として先づ第一に挙ぐ可きは医学部卒業生中既に北平大学総長の地位におさまつてゐる傑物が居る。誰あらう大正七年卒業の徐誦明（字軾遊）先生である。聊か九大の誉としても敢て恥しくはあるまい。のみならず其の御息女徐幼慧女士も父に劣らず目下我が医学部に研究して居る事である。或ひは御孫さんも来るかも知れないとは専ら嚆矢の話である。」⁴としている。

⑳王伯駿

1903年生まれ、少將軍医であり、江西医学院教授でもある。河南大学医学院を卒業して九州大学に留学し、腹腔外科を専攻し、郭沫若と同級生で、郭は王の結婚立会人でもある。日中戦争時、桂など全国を回りながら手術を行なった。その後、孫連仲個人病院で働き、1946年からは河北省立病院長、1949年に江西医専に所属し、1954年に江西医学院に改名される。1955年に『外科学総論講義』を主編し、教育部に医科大学教材として認定される。その後『蛇毒毒性の化学分類』の課題研究に取組み、医学発展のために貢献した。

㉑何君平

インドネシアに移住し、1927年に上海東南医学院を卒業して、上海東南医院の眼科医師になった。1933年に日本に留学し、1936年に東京帝国大学医学部を卒業し、九州帝国大学医学部の耳鼻咽喉科で研修を行った。1937年に日中戦争が起き、故郷である海南島に戻り、海口市で眼科診療所を開き、1939年から45年まで香港で医師活動を行なった。その後上海市第二人民医院で眼科医師として招聘され、主任医師を担当

4 『留学生後日物語』

しながら、眼科診療所も開設し、眼病防止活動を行なった。1952年から上海市衛生局から上海市眼病防止教育センターの主任教授になり、華南地域の失明治療人材を養成する中核メンバーとして貢献した。よって上海市の高度医療従事者として表彰された。

㉔鮑耀東

1935年4月から1939年3月まで東京第一高等学校理科を卒業し、1939年4月から1943年3月まで九大に留学し、その後の1945年9月まで九州大学附属医院第一外科医師、助教、研究生になり、1945年8月に医学博士学位を取得した。1947年2月から1957年7月まで南通医学院外科教授と附属病院の外科主任、1958年7月まで蘇

州南通医学院外科教授附属病院院長を務めた。1958年8月から1959年8月まで天津医科大学脳外科で研修を受け、その後1984年6月まで蘇州医学院教授、附属第一医院外科主任兼神経外科主任となり、1981年11月に国务院学位委员会が授与した五つの神経外科博士院生の研究生指導教官の一人になった。研究論文など200篇を発表し、中国医学百科全书神経外科分冊など多くの教材を編纂した。

㉕于水竹

北京大学医学を卒業して留学し、解放後は台東医院で内科医として活躍した。1966年には『6.26指示』により東平県に下放された。

3. 台湾からの留學生

1) 學生名簿における留學生データ

入学年	學生等	医学科	氏名	出身地	卒業年	出身校	備考
1915	學生	医学科	廖行生	嘉義州	1917		
1919	學生	医学科	石文煥	台中州	1923		
1926	學生	医学科	李呈奇	新竹州	1930		
1929	學生	医学科	張進通	台南州	1933	台北	大学院進学、順天堂医院
1931	學生	医学科	陳金富	台南州	1935	台北	開業
1932	學生	医学科	朴耒先	高雄州	1936	松江高	開業
1933	學生	医学科	陳迅雷		1937	台北	
1933	學生	医学科	韓文鳳	高雄州	1937	台北	開業
1934	大学院		張進通	台南州	1936		順天堂医院
1934	學生	医学科	林建章	新竹州	1938	台北	開業
1934	學生	医学科	沈水鐺	台南州	1938	台北	開業
1934	學生	医学科	蔡桂林	台北州	1938	佐賀高	開業
1934	學生	医学科	徐堯輝	新竹州	1938	台北	開業
1935	學生	医学科	徐明俊	台北州	1939	台北	開業
1935	學生	医学科	鄭培禮		1939	台北	
1935	學生	医学科	李朝章	台北州	1939	台北	開業
1935	學生	医学科	廖貴英		1940	台北	開業
1935	専攻生		許世賢 (女)	台南州	1938		

1937	学生	医学科	邱魏根		1941	台北	中華人民共和国北京市立中医研究所 長、魏正明
1937	学生	医学科	鄭錦城		1941	福岡高	開業
1938	学生	医学科	曾萬龍	高雄州	1941	台北	開業
1938	学生	医学科	陳金山		1941	台北	開業
1938	学生	医学科	林仲簫		1941	台北	
1938	学生	医学科	林秋棟		1938	二高	
1938	学生	医学科	林季百		1941	台北	開業
1938	学生	医学科	林玉聲	新竹州	1941	台北	開業
1939	生徒	医科 専門部	高清波	台南州	1942		
1939	生徒	医科 専門部	謝長輝	台南州	1942	台南一中	開業
1939	生徒	医科 専門部	陳清輝	台南州	1942	台南二中	開業
1939	生徒	医科 専門部	林樹芬	新竹州	1942	新竹中	開業
1940	学生	医学科	劉聯益	台南州	1943	台北	台南市衛生院長
1940	学生	医学科	林瑞銖		1943	五高	開業
1940	学生	医学科	林新澤	台北州	1943	台北	省立台北結核病防治院
1940	学生	医学科	周永欽	台北州	1943	五高	開業
1940	生徒	医科 専門部	許鏡永	台南州	1943	台南二中	開業
1940	生徒	医科 専門部	魏定雲	台北州	1943	台北二中	開業
1940	生徒	医科 専門部	陳金樹	台南州	1943	台南二中	台湾省立澎湖医院長
1940	生徒	医科 専門部	林楊仁	台北州	1943	園部中	台湾省台北市城中衛生所
1941	生徒	医科 専門部	吳重坎	台中州		台南一中	開業
1941	生徒	医科 専門部	陳永芳	台南州		台南二中	開業
1941	生徒	医科 専門部	陳省吾	台南州		台南二中	開業
1941	生徒	医科 専門部	劉建基	台南州	1942		
1941	生徒	医科 専門部	林金鏡	台南州		嘉穗中	台南県立新営病院長
1942	学生	医学科	王義雄	嘉義州		松江高	開業
1942	学生	医学科	羅燦	屏東県		高知高	開業
1942	生徒	医科 専門部	柯丁選			豊国中	開業

1942	生徒	医科 専門部	鄭泰安	台南州		台南二中	高雄市衛生院長・省立高雄医院副院長
1942	生徒	医科 専門部	鄭泰平	台南州		台南二中	開業
1943	専攻生		邱氏碧雲	台中州		五高	
1943	専攻生		永井宏成				
1944	専攻生		曾萬龍				

他の博士学位留学したメンバーもいる。

張進通（1938）邱雲福（1938）、梁宰（1938）、許世賢（1939）、徐千田（1945）、廖貴英（1945）、林啟宗（1945）、藤桂三（1945）董大成（1945）、永村鴻（1945）、鄭錦城（1946）許強（1946.8.8）、蘇丁受（1946.1.10）蔡錫均（1947.4.23）陳麗澤（1947.7.25）

2）人物像

①廖行生

（1890-1943）総督府は台湾人の日本留学をあまり望まなかったが、教員の養成や、地方名士からの要請などもあって、厳しい条件を設けて、台湾総督府直轄学校官費留学生と地方名士の子弟による日本留学を一部認可した。しかし同時に、さまざまな規定を設けて、彼らの修学状況を把握しようとした。1909に同志社中学校に在籍している台湾人留学生の中には廖行生がいた。その後の1915年に九州大学医学部に入学するが、二年後に退学し、京都帝国大学経済学部に変更して入学し、1922年に経済学士学位を取得する。その後、台湾に戻り、日本勧業銀行台北支店に入り、後に台南州米穀購買利用組合に転職し、後に兄弟と共に設立した永豊同族恒産業株式会社の取締役を務め、その後分家して期米商売を行なった、失敗してしまい、負債を多く抱えたまま1943年に亡くなったという。

②張進通

（1908-1984）嘉義望族出身で、1929年から

1933年までに九州帝国大学医学部で学び、卒業後帰国して医師出身の許世賢女史と結婚し、再び九州帝国大学医学部の大学院で学び、1939年に博士号を取得した。1941年に帰国して嘉義市に「順天堂医院」を開設して、「医国医人」の理念の下で経営し、嘉義県医師会第一回、第四回の理事長などを務め、妻である許世賢に参政させ、また娘三人にも医学を勉強させた。現在は「張進通許世賢教育事務基金会」を毎年定期的に中学生数学及び自然科学能力コンテストを行い、人材発掘と、基礎科学人材の育成に励んでいた。

③許世賢

（1908年4月1日-1983年6月30日）台南市出身で、東京女子医学専門学校で学び、帰国して台南州立台南病院に勤め、後に泰徳医院、世賢医院を開設した。1933年に張進通医師と結婚して九州帝国大学に留学し、1934年から1938年まで専攻生として産婦人科を専攻し、夫婦共々1939年に博士学位を取得した。許は台湾で初めての女子博士として学び、女子医学博士、日本でも第三位の女子医学博士である。帰国後順天堂医院を開設し、第二次大戦後は嘉義女子中学校校長として、台湾では初めての女子校長になり、高校部を創設した。1954年に省議員、台湾議員になり、1968年嘉義市長、1972年立法委員、1982年に再度嘉義市長になった。娘二人も市長に当選され、親子三人が市長になったので台湾の歴史上初めてのことである。

④蔡桂林

詳細は不明であるが、「ズルフォンアミド」剤ノ生体内變化ニ就テ（第四回）」『日本消化機病學會雜誌』Vol. 43 1944を發表した。

⑤徐堯輝

（1912- ?）九州帝国大学医学部卒業し、九州帝国大学医学部副手と小野寺内科教室医員になった。その後福岡県飯塚病院内科主任、徐内科医院を設置し、新竹市医師公会理事長、省医師公会理事を務めた。「赤痢症候学知見補遺」「二頭膊筋特発攣縮の研究」『医学研究』大道学出版部 1957.1を發表した。

⑥林建章

（1914-1941）九州帝国大学医学部卒業して九州帝国大学医学部附属医院小兒科勤務した後に台中医院小兒科医師となり、1941年に林小兒科

医院開業した。新竹市医師公会常務理事、新竹県医師公会理事などを務めた。

⑦林玉聲

（1916- ?）九州帝国大学卒業、九州帝国大学付属委員内科副手兼レントゲン主任となり、その後新竹病院内科医師、台湾省衛生処香検疫所主任などを務めた。

⑧鄭培禮

1941年に台北帝国大学の嘱託となり、解放の際には台北帝大医学部附属医院各科受け継ぎ責任者、第三柳田内科に配属し、解放後は第一付属医院の副教授となった。

⑨鄭泰平

高雄市凱旋医院を経営し、中央研究院研究員も務めた。

4. 満洲国からの留学生

1) 学生名簿における留学生データ

入学年	学生等	学科	氏名	出身地	卒業年	出身校	備考
1935	専攻生	医学科	王鐘泉	奉天省	1938	奉天医科専門学校	
1938	専攻生		程鵬遠	奉天省	1940	南満医学堂本科	

2) 人物像

○程鵬遠

西安にある第四軍医大学衛生処に勤めながら、「新時代軍隊学院学教職員の保健事業に関

する考え」『解放軍保健医学雑誌』6（3）2004、「軍隊医療カードの導入方法」『人民軍医』47（2）2004などを発表した。

5. その他の留学生

1) 学生名簿における留学生データ

入学年	学生等	学科	氏名	出身地	卒業年	出身校	備考
1943	学生	医学科	清川弘成			佐賀高	
1943	学生	医学科	莊大石	1947		佐賀高	

	医学専門 部 (生徒)	医学科	張義雄	1946			
	医学専門 部 (生徒)	医学科	蔡榮基				
	学生	医学科	黄阿莊	1946			

2) 人物像

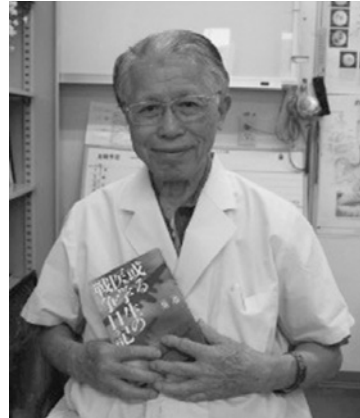
○蔡榮基

論文として蔡榮基等「大分県南部地方にみられる所謂日向熱の本態について」『久留米医学会雑誌』20 1957がある。また、次の新聞記事から蔡榮基は台湾出身で、医者として九州に残り、様々な活動に参加したことが確認できる。『読売新聞』の新聞記事「閃光や轟音の埜塙と化したここは地獄 空襲体験、香川榮基さん『或る医学生の戦争日記』発行 (2016年8月25日)」を見よう。

小倉北区大島で開業医を営む香川榮基さん(89)が自分史「或る医学生の戦争日記」を発行した。香川さんは日本統治下の台湾出身。小倉の福岡県立医学歯学専門学校(現・九州歯科大)で学んだ太平洋戦争末期の空襲体験を柱に、平和への願いを込めた。

香川さんは台湾名・蔡榮基。旧制中学を卒業後の1944年2月に日本に渡り県立医歯に入学した。現在の小倉北区金鶏町で学生生活を送る中、同年6月16日、旧5市で死者314人を出したとされる北九州初空襲を手始めに敗戦まで7回の空襲を体験、目撃した。…

戦後は九州大医学部に転学し卒業。59年に現在地に開業し、67年に日本国籍を取得した。米寿を機に同人誌「九州作家」代表の中尾三郎さんの勧めで、葵基(あおいもと)のペンネームで同著を発行した。「多くの空襲を受けた小倉で生き延びることができた者の責務として、戦中戦後の苦難の



歴史を知ってほしかった」と話す。

6. おわりに

以上、九州帝国大学医学部の学生、専攻生、生徒を民国23名、台湾9名、満洲国1名、その他1名の合計34名を取り上げた。その中には郭沫若のように、訪日科学代表団の団長として訪日(来校)して講演などを通して学術・文化交流を行い、中日友好協会名誉会長になり、日中の友好のために尽力した先達もいれば、蔡榮基のように、医者として九州に残り、空襲を体験したことから、書籍を上梓して戦中戦後の苦難を世に知らせる活動を行った先達もいる。

本稿で取り上げられなかった先達の足跡については今後との課題とし、引き続き留學生に関する新しい史料の発掘と研究に取り組んでいきたい。

【参考文献】

- 九州帝国大学医学部編『二十五年史』九州帝国大学医学部事務所 1928.10
- 九州大学医学部『五十年史』九州大学医学部創立百周年記念事業後援会 1953.12
- 九州大学医学部『七十五年史』九州大学医学部創立七十五周年記念事業後援会 1979.6
- 『九州大学医学部百年史』九州大学医学部創立百周年記念事業後援会 2004.3
- 九州医報編集部編『九州大学医学部学友名簿』九州大学医学部同窓会 1963.9
- 九州大学創立五十周年記念会『九州大学五十年史学術史上巻』九州大学創立五十周年記念会 1967.11
- 武継平著『異文化のなかの郭沫若 ― 日本留学の時代』九州大学出版社 2002.12
- 岩佐昌璋「福岡滞在期の郭沫若文学の背景その他」『言語文化論究』九州大学大学院言語文化研究院 17 2003.3
- 折田悦郎「九州帝国大学における留学生に関する基礎的研究」科学研究費補助金基盤研究（C）（2）研究成果報告書 2004
- 金斑実「『學生寫真帳』から見た九州帝國大學農學部の留學生」『九州大学留学生センター紀要』第23号 2015.3
- 金斑実「大学文書館所蔵資料から見た九州帝國大學法文學部の留學生」『韓国言語文化研究』第21号2015.03
- 金斑実「九州帝國大學に學んだ留學生 ― 工學部を中心に ―」『九州大学留学生センター紀要』第24号 2016.3
- 金斑実「九州帝國大學に學んだ留學生 ― 醫學部朝鮮人留學生を中心に ―」『九州大学留学生センター紀要』第25号2017.3

追記

本研究は、九州大学平成29年度 QR プログラムつばさプロジェクト「九州帝國大學で學んだ東アジア留学生による『知』の越境」（代表者：金斑実）の一部成果である。